

論文

阪急百貨店美術部と新たな美術愛好者層の開拓

山本 真紗子*

今日、広く美術を愛好する人たちにとって、百貨店の存在は欠かせないものとなっている。大都市部にある主要な百貨店は、展覧会を開催する展示場を設けており、一般顧客にも人気が高く、広く美術鑑賞の場として認知されている。さらに90年代には独立した美術館を設置する百貨店まで現れた。現在は経営環境の厳しさなどから文化事業の縮小・美術館運営からの撤退も見られるものの、百貨店で美術を楽しむという行為は、なお一般に浸透しているといえるだろう。

さて、このような百貨店による美術展覧会や美術関連事業を対象とした研究は神野由紀・廣田孝らの研究など一部の例外を除いて自社史のなかで言及されるにとどまり、高島屋と三越が百貨店事業全体の社史とは別に美術部の歴史をまとめている程度である¹。とくに神野²は近代社会におけるテイスト＝趣味の問題を、三越百貨店と「三越趣味」から分析したが、その過程で三越が出版した様々なPR誌や文化活動・博覧会や展覧会についても詳細に調査している。本稿では先行研究が対象とした呉服店系百貨店と異なる性質をもつものとして阪急百貨店美術部をとりあげる。

三越は、学識者らを招集し研究会活動を行わせ、また自社発行の刊行物のなかで良き「趣味」を論じた記事を掲載するなど、良き「趣味」つまり「三越趣味」を啓蒙するというスタンスをとっていた。美術部においてそれは、一流の画家・作家の作品を目にする展覧の機会を提供し、また商品としても適切な価格で提供するということであった。こうした姿勢は阪急百貨店においても同様であるが、阪急百貨店の独自性をあげるなら、次のようなことになるだろう。それは、一流・名品とよばれる最上級の美術品と、民芸売場の設置に代表されるような自店舗の主要ターゲットであるサラリーマン層でも購入できる美術品とのどちらも重要視していたことである。五十殿利治³は近年、近代文学史における「読者」、近代音楽史における「聴衆」の誕生と並ぶ美術における「観衆」の成立を論じたが、こうした新たな美術愛好者層の開拓とその成立が阪急百貨店美術部の活動からうかがえるのである。

本稿では、阪急百貨店美術部の特色を、設立者小林一三と雑誌『阪急美術』の編集長山内金三郎を軸に明らかにする。『阪急美術』は何度かの改称を経て、戦後は『日本美術工芸』として700号まで発刊された。我が国の美術雑誌としては発刊期間の長い部類に入る。本稿では『阪急美術』として発刊された昭和12年から昭和16年までを中心にとりあげた。

1 阪急百貨店美術部の設立

ここでは、『阪急美術』発刊の主体であった阪急百貨店と阪急百貨店美術部の設立の経緯⁴を簡単にまとめておく。また、阪神急行電鉄株式会社（以後阪急電鉄）の専務取締役であり阪急百貨店創業者である小林一三の美術への関心について確認していく。

1-1 阪急百貨店の創業から美術部設立まで

阪急百貨店は、阪急電車の乗降客及び沿線の人々へのサービスの一環として宝塚線、神戸線の起点梅田駅に開業された。大正9（1920）年10月30日阪急本社ビルの竣工と同時に開業した阪急直営食堂を前身に、大正14（1925）

キーワード：阪急百貨店、美術部、阪急美術、小林一三、山内金三郎

* 立命館大学大学院先端総合学術研究科 2008年度修士、立命館大学衣笠総合研究機構 ポストドクトラルフェロー

年6月1日ターミナルデパート阪急マーケットとして新たに開業、昭和2(1927)年11月の百貨店第1期ビルを起工に続いて⁵同4(1929)年食料品・雑貨・食堂を中心とした「阪急百貨店」を竣工・開業した。これが阪急百貨店の始まりである。

阪急百貨店は、電鉄会社によるターミナルデパートの先駆けであるが、いわゆる百貨店業界では相対的に後発の企業である。三越・高島屋や大丸など先行の百貨店はいずれも呉服商から百貨店へと変わった。そのため新図案を募集するなど呉服はとくに改良や売り出しに力が入られた。一方、阪急百貨店は食料品や日用雑貨を中心に扱ういわば大衆向け路線をとった⁶。昭和4年4月13日・14日掲載の開店新聞広告には「いよ(原文くり返し記号)* * 四月十五日から開店いたしますが どこよりもよい品物を、どこよりも安く売りたい」とのコピーがある(『25年史』p104)。これは小林一三の百貨店事業への基本姿勢であり、美術部においてもこの発想が根底にあったと思われる。

こうした方針は、電鉄利用者や沿線居住者、大阪市内の顧客、サラリーマンらに歓迎され、阪急百貨店は短期間に拡張を繰り返した。そして昭和7(1932)年の第3期改築で、「充美会(じゅうびかい)」の結成と古美術品売場・茶室福寿荘開設が行われた。これが阪急百貨店美術部(以下・阪急美術部)の始まりである。同9年9月には洋家具売場の東側の一部に洋画陳列場を開設、第1回展として「春秋会洋画展」(9月10日～30日)が開催された⁷。

さて、当時の大阪における百貨店美術部の位置とはどのようなものであったか。百貨店で初めて「美術部」を設けたのは三越である。美術部担当の北村直次郎⁸を中心に明治40(1907)年9月大阪支店に新美術部を開設した(同年12月東京本店にも新設)。翌年半切画展覧会を開催、これが百貨店での最初の展覧会といわれる。明治42(1909)年頃からは油絵の展示がはじまり三越洋画展として定着した。また、高島屋は同42年現代名家百幅画会を心斎橋店で開催、明治44(1911)年11月美術部を開設した。百貨店美術部がいずれも大阪で始まったことは興味深い。ちなみに昭和11(1936)年には大阪市立美術館が開設されている。

こうしたなかで阪急美術部は、いくつかの方針を決めていたと思われる。

第一に、阪急百貨店のポリシーである、良いものを安く提供するという姿勢を美術品にも適用したことである。それは『阪急美術』第1号掲載の小林一三の文章「買って置いて必ず損のないもの」が端的に表している⁹。

(資料1) 小林一三「買って置いて必ず損のないもの」『阪急美術』1号、昭和12(1937)年

美術工芸品の優秀なるものは、昔から、年代を経れば経るほど珍重され、愛玩され、そこに己づと、値打づけられるものがある。勿論、景気不景気によつて多少の変動は免れないとしても、普通の日用品よりは、ある特殊性を持つだけに、自然と騰りを見て、現在では、財産の一部として取扱はれるやうになつて居るのも事実である。

この事が、よいか、わるいかは、人によつて議論があるだろうと思ふが、兎に角、高級な美術工芸品は、買って置いても損にはならない……と言ふ信用だけは確かにあるやうになつたのは、此種の商品を取扱ふ商売人にとっては誠に有難い話だと思つてゐます。

然るに、茲に其反対に百貨店で取扱ふ美術工芸品は、まだ其域に達しない、所謂百貨店向きの美術品として、「書画骨董品」といふ資格に乏しいやうに思はれて居るのも事実である。私は阪急百貨店の美術品だけは、買って置いても損のゆかない程度のもにしてほしいといふ年来の希望から、充美会を設立して、斯界の先輩諸君に犠牲と払つて頂いたり、福寿荘を建築して美術に親しむやうに青年子女のお集りをお願いしたり、それから、美術工芸品に就てのいろ(原文くり返し記号)* * の年中行事など、いつも指導的精神を以て試みるやう、第三者の立場ではあるが注意もした。が実は、この商売は適当な人を得るのがむつかしいので、今日まで心ならずも消極的に経営をして居つたのでありましたが、今度幸ひに、山内神斧君といふ適任者を見附けたので、同君を中心にして、これから「買って置いて必ず損はない」といふ美術工芸品の商売を、盛んにやるやう薦めてみました。それで、御覧の如く陳列室の改造や、商品の選択など、皆さんの希望に副(ママ)うやう着々やつて行くだらうと思つてゐます。手初めに此度その機関誌として『阪急美術』を発行することになりましたが、始めから、中々理想通りうまくはゆくまいと思ひますが、この『阪急美術』を通じて、美術工芸に対する愛好同人の一団を組織して、その足らざるを補ひ、その及ばざるを訂し、その盡(ママ)きざる好嗜を養ひ度いと思つてゐ

ます。

どうぞ、何分宜敷くお引立下さいますやう、愛好者の一人として御願ひ申上ます。

(一部旧字から表記を改めた。以下同)

他の著作や部下による回顧談等にも同趣旨の発言が見られ、小林は常々こうした思いを抱いていたことがわかる¹⁰。ただし、単に安ければよいというものではなく、一流のものを扱うことにも留意していた。充美会の古美術品や、山内神斧金三郎(後述)により企画された「半弓会」(洋画・日本画)や「阪急工美会」(美術工芸品)がそれで、当時の画壇の一流画家・工芸作家の作品を集めた展覧会をおこなった。

第二に、既存の古美術商・洋画商らをうまく活用したことである。これは、ノウハウや蓄積の乏しい阪急美術部にとって合理的かつ最善の選択であったのだろう。

例えば洋画廊である。森川美術店(森川喜助、大阪市西区江戸堀南通1丁目)や美術新論画廊(昭和6年10月開設、岩田五郎左衛門、大阪朝日ビル5階)など大阪では洋画を扱う画廊が早くから存在し、書店の丸善や丹平商会(のち丹平製菓¹¹)も画廊をもっていた。

阪急百貨店はこうした先行の画廊に積極的に売場を開放した。大阪に初めてできた画廊・ニュートン画廊¹²は、東京の青樹社(鈴木里一郎)・京都の三角堂(薄田晴彦)とともに昭和9年5月19日から27日まで阪急百貨店で「松方氏蒐集・欧州美術展覧会」を開き西洋美術品の売立をおこなった。この三画商は翌年フランスの「マルセル・ベルネム日本代表ロジェ・ミツチエル」¹³と共同で「仏蘭西絵画展覧会」(昭和10年6月26日～7月4日)を、青樹社は単独で「欧州絵画展覧会」(昭和11年4月10日～16日)を阪急百貨店で開催した¹⁴。ただし、洋画部門は次第に春秋会など自店の企画で展覧会を行うようになりそちらが中心となったようである。

古美術の分野では「充美会」が組織された。大阪で指折りの古美術店10店を集め組織されたもので、各店のブースのほか、各店が月替わりで担当する充美会の展示スペースがあった。

(資料2) 阪急充美会広告、『阪急美術』1号掲載

阪急充美会とは 御承知下さつてゐることゝは思ひますが、大阪と言ふよりも全国的に響いた、第一流の骨董商
井上柳湖堂 池戸高山堂 晴海商店 戸田弥七商店 太田佐七商店 山中簪堂
児島米山居 坂田作次郎商店 水原聴雨堂¹⁵

の諸家に御願ひして、筋の通つたもの、これならお買ひになつて置いて家宝にもして頂けやうと言ふものを、常設的に陳列して居ります。直接これ等の店へお出でになるのも気がひけるし、店は極く普通のしもた屋さんで、それらしいものは殆ど店に出されて居りませぬ。それが阪急の六階へお出で下さつたら何百円何千円と言ふものが自由に鑑賞して頂けませうし、また掴せられる心配もなく、値段相応と言ふよりもいくらか安い目につても頂けるのです。大阪美術倶楽部の会頭児島嘉助氏は、阪急で御願ひするものは、殆ど他の隠れた費用が掛らないから、何処よりも安く賣れる、直接店へお出で下さつても、これよりは高いと話してゐられる程です。いつも意義のある陳列をして居りますから、御立寄下さい。

ここにおいても、阪急美術部で購入することがすなわち、「買って置いて損のないもの」であることが強調されている。

また、阪急百貨店には百貨店で初めて専用の民芸売場も設置された。河井寛次郎がモデルルームを設計しており¹⁶、企画展にも日本民芸館関連のものがいくつか見られる。こちらがサラリーマンにも購入できる美術品としての役割を担い、雑誌『阪急美術』や催し物のなかでもたびたび取り上げられた¹⁷。

1-2 阪急百貨店創業者小林一三

阪急美術部は百貨店設立からほどなく設置されているが、例えば茶道との関わりが深い、民芸など工芸品の扱いが大きいなど、一般的な「美術」という語の持つイメージと若干異なる性格を持つ。それには小林一三の関心が少

なからず反映していたと思われる。

阪急百貨店の設立者小林一三(1873～1957)は山梨県に生まれ、15歳で慶応義塾に入り19歳で卒業、20歳で三井銀行に入社した。三井銀行の上司には茶人としても有名な益田孝や高橋義雄(箒庵)がいた。入社後すぐに高橋義雄が支店長を勤める大阪支店に配属、同地の芝居や花街の文化に触れる。また同店では担保品の古美術品・茶道具の手入にも関わる。このころの経験がのちの美術に対する関心、素地、人脈を養ったようだ¹⁸。明治40(1907)年34歳で三井銀行を退職、同年箕面有馬電気軌道株式会社の創立に関わり専務取締役となった。これが発展し阪神急行電鉄株式会社となる。小林は、電鉄の路線拡大と同時に宝塚新温泉(明治44[1911]年営業開始)、宝塚唱歌隊(宝塚歌劇団の前身)の組織(大正2[1913]年)、電鉄沿線の住宅地開発など斬新な手法により阪急電鉄を複合的な企業グループへと発展させた。阪急電鉄以外にも、東京電燈株式会社(昭和2[1927]年取締役就任、同17[1942]年解散)や東宝映画株式会社(昭和12[1937]年創立)など複数の企業の重役を務め、また第2次近衛内閣商工大臣(昭和15[1940]年就任、翌年辞任)、幣原内閣国務大臣・戦災復興院総裁(昭和20[1945]年就任)など幅広く精力的に活動を続けた。戦後一時公職追放をうけるも昭和26(1951)年解除となり、その後は東宝の映画事業や宝塚歌劇などを中心に実業界に名をはせた。

一方で、慶応義塾在籍中から文筆活動に関心を寄せ、実業界に身を置いてからも随想や評論、社会時評に筆を揮い、全集も編まれている。また、前述の通り美術・茶道への関心も高く20歳代から蒐集を開始¹⁹、とくに茶道は大正4(1915)年ごろから生方朝生庵に師事、芦葉会など政財界のメンバーを中心とした茶や美術に関する集まりも主催し、昭和11(1936)年本邸に隣接して雅俗山荘を建てた。『阪急美術』の執筆者の顔ぶれを見ても、小林の知己や関係者が多く、小林自身ものちに連載を担当している。

2 雑誌『阪急美術』の創刊とその特色

ここでは雑誌『阪急美術』の内容について概観する。『阪急美術』は阪急美術部の活動を補完するものとして創刊される。最初に『阪急美術』の雑誌としての体裁について述べ、次にその主要な寄稿者たちについて紹介する。

我が国では明治時代には少なくない美術雑誌が創刊され、とくに明治30年代以降は美術団体の機関紙はじめ多種多様な雑誌が発行される²⁰。京阪神では大正時代を中心にいわゆる趣味人たちを同人とする雑誌もいくつか現れた²¹。一方、各百貨店も独自のPR誌を明治30年代後半から続々と刊行する。高島屋と大丸は自社で出版社も持っていた。

(表1) 百貨店が刊行した戦前の主なPR誌

	創刊・発刊したPR誌		創刊・発刊したPR誌
高島屋	明治35年『新衣裳』(月刊) 大正15年『百華新聞』 昭和10年『高島屋宝典』 昭和23年『読物街』(月刊)	そごう	明治38年『衣裳界』 大正2年『母子草』(妊産婦育児用)
		松屋	明治39年『今様』
三越	明治32年『花ごろも』 明治33年『春模様』『夏模様』 明治34年『水面鏡(ひもかがみ)』 明治36年『時好』『みやこぶり』など。 明治41年『みつこしタイムス』 明治43年『大阪の三越』 明治44年『三越』	松坂屋 (いとう呉服店)	明治39年『衣道楽』
			明治43年PR誌『モーラ』に改題。 昭和3年『マツサカヤ』(月刊) <small>(ママ)</small>
			昭和7年『松坂屋美術』
			昭和8年『マツサカヤ漫画』 <small>(ママ)</small>
			昭和10年『新装』
			昭和12年『趣味道場』
			昭和25年『新装』季刊で復刊。

山形屋	明治36年『クレハ』（月刊）	大丸	明治40年『衣裳』 明治41年『婦人クラブ』 大正2年『大丸』
白木屋	明治37年『家庭のしるべ』 明治39年『流行』に改題 大正7年「白木タイムス」に改題	伊勢丹	大正5年 通信販売用PR誌『装』

*宮野力哉『絵とき百貨店「文化誌」』巻末百貨店文化誌年表ほかを参考に作成。

美術部のPR誌としては、松坂屋が昭和7（1932）年に『松坂屋美術』を刊行している。また、大阪の百貨店独自の刊行物では『大阪の三越』がある。杉浦非水らが描いた多色の美しい小冊子で、口絵や中絵などほぼ毎号図版が付き、童謡や童話、作家による随筆や専門家による読み物など多様な記事が掲載された。

雑誌名から、当時の百貨店PR誌の多くが「衣」・「装い」、つまり着物の記事を中心に編集されていると思われる。これは、前述のように着物が各百貨店にとって主力、かつ最重要の商品であったことからきている。そこには、図案部・意匠部と呼ばれるデザイン担当部署や、著名な画家たちの手による着物の新図案が掲載されていた。

阪急百貨店の場合どうか。母体である阪急電鉄は、創設時にPR誌『最も有望なる電車』を出したのを手始めに、その後も『山容水態』や宝塚歌劇の『歌劇』など自社事業のPR誌出版を盛んにおこなった。これらの雑誌は単なる宣伝やカタログではなく、読物や評論など内容にもこだわった。『阪急美術』もその一つで、とくに編集長山内金三郎の存在は雑誌の内容の充実不可欠であった。

2-1 『阪急美術』の書誌

『阪急美術』1号の奥付には昭和12（1937）年10月1日印刷、同10月10日発行、定価金20銭（送料3銭）²²とある。ただし実際は発刊後3年以上無料配布されたい。発行所は「大阪市北区 梅田阪急百貨店」、編集兼発行人は山内金三郎、印刷所は大阪市西区京町堀上通二丁目大原庄太郎・大原印刷社で、これらは改称まで変更はない。版型は20.5cm×13.3cmで、ほぼA5サイズであった。発刊以来月刊誌として45号まで発行、46号からは体裁はほぼそのまま『汎究美術』と改称された。創刊当初は30ページ程度、19号あたりからは40ページ程度に増加、最大66ページ（32号）となった。

（表2）『阪急美術』名称の変遷 *いずれも月刊。

名称	開始	停止	発行所	備考
阪急美術	1号（昭和12年10月）	45号（昭和16年6月）	阪急百貨店	
汎究美術	46号（昭和16年7月）	54号（昭和17年3月）	阪急百貨店内汎究美術編集部	昭和17年2月美術雑誌『翠彩』を合併。
美術・工芸	1号（昭和17年4月）	31号（昭和19年12月）	阪急百貨店内美術・工芸編集部	昭和18年雑誌『新進』を合併。昭和19年6・7月休刊。
日本美術工芸	32号（昭和20年1月）	700号（平成9年1月）	阪急百貨店内日本美術工芸社	昭和20年2～9月休刊。同年10月（33号）より翌年4月（37号）まで不定期に発刊、昭和21年6月（38号）より月刊再開。

2-2 『阪急美術』の内容

(1) 表紙・装丁

『阪急美術』は表紙に限り和紙を使用している（表3-1）。寿岳文章の和紙の解説記事（18号では寿岳記事のみ和

紙を使用)や表紙使用和紙の解説がついた号もある。しかし、『汎究美術』改称後は物資調達の問題から洋紙に変更された。装丁者の変遷は表3-2の通りである。同デザイン(装丁者)の場合でも各号で使用色を変えた。6号までは表紙に焼物の原色図版が貼付されていたが、7号からはなくなり口絵がつく。7号以降は、装丁者とは別に「阪急美術」の題字を画家・書家らが揮毫した。いずれも神戸や大阪に所縁のある芸術家である。

(表3) 表紙装丁

(表3-1) 表紙使用和紙

号数	使用和紙
4、8～11	出雲手漉和紙
6	出雲手漉紅柄紙
7	大和国櫛手漉和紙
21～41	丹波手漉和紙

*記入があるもののみ。使用和紙名の
ない号も表紙には和紙を使用。

(表3-2) 装丁者一覧

号数	装丁者
1～3	不明(記載なし)
4～6	小磯良平(洋画家)
7～12	鍋井克之(洋画家)
13～27	芹沢銈介(染色家)
28～40	棟方志功(版画家)
41～44	川西英(版画家)

(2) 口絵

7号より表紙の貼付図版にかわり毎号原色図版が掲載された。昭和13(1938)年は焼き物で田辺加多丸の連載「陶磁器鑑賞」と連動した(14号まで・15号掲載なし)。昭和14年(16号～27号)は時代裂(解説:寒溪山人²³)。昭和15年(28号～39号)は「時代人形十二ヶ月」、昭和16年(40号)からは阪急美術部開催展覧会の出品作から一点掲載された。

目次の上部にも、当初は美術部の展示品が、のちにはその号の発刊月に阪急美術部が開催する展覧会の出品作品から一点、モノクロで掲載された。昭和16(1941)年からは「○月の挿花」として月替わりで花器・挿花が掲載された。

(3) 読み物・連載

内容は大きくわけて二つになる。一つは阪急美術部の催し案内とそれに付随する読み物、もうひとつは連載記事である。また、阪急美術部のPR誌として阪急(洋)画廊だより、古書暦(古書売り場催事案内)、充美会の催事等美術品関連売場・催事の告知が毎号掲載された。

(表4) 『阪急美術』の連載

掲載号数	執筆者	タイトル
3～12	田辺加多丸 ²⁴	陶磁器鑑賞
4～12	小野賢一郎 ²⁵	茶味放談
6～37(休止有)	文:浩水(中井) ²⁶ 、絵:神斧(山内金三郎)	新茶室めぐり
13～15	坂田作治郎(談)(古美術商、茶人)	日々軒雑話
17～27	中井浩水	従吾所好之記
26～39	いちみのや ²⁷	形物香合譜
28～34(休止有)	米山居主人(児島嘉助、古美術商)	昔を語る
32～39	高原慶三 ²⁸	茶杓博士
●40～	いちみのや	雅帖
●42～	(編集部分担執筆)	茶会記
●43～	(指導)吉田宗信	お茶に招かれた時の心得帳
●43～	竹葉亭主人 別府哲次郎	味覚放談
●44～	(回答者)蜷川第一(*対談形式)	蜷川第一氏に『仁清』を聴く

*連載のタイトルは目次掲載のものを採用した。●印の連載は『汎究美術』改称後も続いたため、連載開始号のみ記載する。

また、いちみのや「竹の花入」(40号～42号掲載)のように、誌上展観や写真入り解説の分冊がつき、番号をそろえると一つの冊子として完成するという試みもおこなわれている。

3 阪急美術部の特色—小林一三と山内金三郎—

ここでは、阪急美術部と『阪急美術』の特色を決定づけた、小林一三と山内金三郎という二人の人物について論じる。

3-1 小林一三と茶

前述のように『阪急美術』連載記事は、茶道・茶道具関連のものが大きな割合を占める。充美会がほぼ茶道具商からなる団体でもあり、そうした記事が集中することも当然であるといえるが、小林自身が茶道具を蒐集するだけでなく、茶道に関する著作をあらゆるほどのこだわりをもっていったことに注目したい。彼は『阪急美術』の後継誌『美術・工芸』に昭和18(1943)年から『大乘茶道記』を連載、同26(1951)年にはそのなかの新茶道問答をまとめた『新茶道』²⁹を出版した。

他にも、『阪急美術』や後継誌には茶室や茶会記の連載がある。近代の茶会記記事は高橋箒庵の『東都茶会記』や『万象録』が知られるが、「東都」とあるように東京周辺が記述の中心である。『阪急美術』掲載の茶会記は断片的ではあるものの高橋没(昭和12年)後の資料である。茶室巡りでは、山内金三郎による茶室の間取り図や茶会を描いた挿絵がついており、京阪神の茶人たちの交流や当時の茶会の様子が活写された。高橋と一時期仕事をともにした小林は、当然高橋の著作を意識していただろう。中井浩水や加藤義一郎ら趣味人との関係が深く茶道に明るい人物を『阪急美術』編集に参加させたことも、茶道重視の姿勢の現れといえる。

本稿では小林の茶道観を詳細に論じることはできないので、先行研究の指摘を引用することでそれに代えたい。熊倉功夫³⁰によると、昭和10年代は益田鈍翁の死に象徴される財界の数寄人の茶が終焉し、大衆と社会との関係を無視しえない新たな茶の時代へと転換した時代という。小林は、とくに戦後の公職追放期(昭和20～26年)を中心に茶道論を執筆、そのなかで茶道の改革についても発言した。家元制度への批判や、新たな職業意識をもった茶道師範やテキスト、茶道学校・茶道道場の新設の主張等である。これらはのち図書館、茶室、美術館、学校などの文化施設を包含する統一した文化センターの構想となり、茶室古彩庵造営・池田文庫の設立など一部が実現された。

同時に阪急美術部内には茶室が設けられ茶会が行われたほか、茶道教室会場としても開放された³¹。『阪急美術』の連載は、初心者向けに陶磁器や茶道具の鑑賞の基礎を説明したり問答形式で解説するものが多い。『阪急美術』や美術部の活動は小林の茶道改革の初期の実践とも位置づけられるのである。

小林の文化事業として代表的な宝塚(少女)歌劇とも共通点が見出せる。宝塚歌劇の変貌についてはすでにいくつかの先行研究が存在する³²。いずれもが指摘しているのが、小林が自身の事業を通して、当時出現しつつあったサラリーマンら新中間層に対して、阪急沿線を舞台とした郊外ユートピア構想による新しい生活スタイルの提示を目指したというものである。渡辺裕は、東京・官の直輸入型に対し、小林＝宝塚側では「国民劇」として「大劇場主義」や歌舞伎折衷型を土台とした民衆路線をとったと指摘している³³。

美術部においても、西洋美術の直輸入を目論んでいたのではないことは明らかだ。洋画をはじめ絵画や彫刻のみを重視するのではなく、茶道具や国産の陶磁器、地方やアジアに目を向けた民芸を取り上げた。それは我国固有の価値観や伝統により多くの人々が気軽に触れられることを目指したものであったといえる。適正価格での販売や、半弓会などにより有名画家の作品を無料で展示することも、芸術の大衆化路線のひとつといえよう。小林の美術観についても少女歌劇と同様の発想が根底にあることが指摘できるのではないだろうか。

3-2 山内金三郎の存在

『阪急美術』の編集人は山内金三郎(1886～1966)³⁴である。このほか、中井浩水、加藤義一郎³⁵らが中心となって編集されていた。

山内の号は神斧^{しんぶ}、大阪生まれで明治42(1909)年画業を志して上京し梶田半古の門下となり、東京美術学校日本

画専科を卒業³⁶。小林古径と同級で前田青邨と同門だった。画家として京都の密栗会（大正4〔1915〕年参加）や蒼空邦画会（大正9〔1920〕年結成）にも参加している。明治44年大阪に戻り新町に美術店「吾八」を開店、若い芸術家達がたむろしたという（大正2年平野町に移動）。このころ吾八に小林がたびたび来店、宝塚歌劇のポスターなどを山内に依頼したこともあった³⁷。吾八では大津絵、泥絵、ガラス絵や玩具・人形類、民芸品などを扱い、海外の玩具を集めた画集『寿々』も刊行した。『阪急美術』内でも郷土玩具等の記事があるのは山内の関心によるものと思われる。

大正8（1919）年再び上京、主婦之友社長石川武美の知遇を得、大正11（1922）年同社に入社、編集と事業企画に参加した³⁸。これがその後の山内に重大な意味をもった。初め山内は挿絵画家として働くが、画家・作家との交渉や編集企画に力を発揮し始めた。当時山本有三を約2年かけ口説き落とし『真実一路』執筆を実現させたなどの逸話を持つ。もともと画家の間に顔が広がったものが、作家をはじめさらに交際の範囲が広がった。のち『阪急美術』題字の揮毫依頼や「半弓会」はじめ種々の企画実現にはその人脈が存分に活かされた。高島屋や三越など先行の百貨店に遜色ない企画を実現できたのはひとえに山内の力によるものである。『阪急美術』6号で半弓会日本画展の値段を掲載したことも山内の発想によるらしく、顧客に安心して買い物をしてほしいという小林の方針を理解した試みであり、かつ画家との信頼関係を持つ山内だから実現した販売手法であるといえる。

さらに『主婦の友』という雑誌に参加したことは山内の考えにもある影響を与えたと考えられる。それは、大衆路線というものであった。『主婦の友』は、既存の婦人雑誌が知識階級を対象としたのに対し、定価を抑え生活改善や家庭経済を扱う実用記事や修養性を重視する大衆向け路線をとった。同社は読者のために同誌推奨品を販売する代理部も持っていたが、これなどは小林の阪急百貨店開設の発想に通じるものがある。家庭手芸品展覧会³⁹などの展覧会・講演・音楽会の開催は山内にとってのち阪急美術部の運営に有益な経験であったらう。

そして小林一三の招きをうけ、山内は昭和11（1936）年8月主婦の友社を退社し翌年阪急百貨店美術部嘱託として入社、『阪急美術』の創刊と以後の編集に携わった。山内の経験と人脈は創設まもない阪急美術部にとって他に代え難いものであった。

山内はその後昭和16（1941）年に阪急百貨店美術部内に「梅田書房」を設立。茶道に興味をもちはじめ芦葉会に参加、雑誌『あまカラ』編集への参加や、地方の郷土菓子に関心を持ち『甘辛画譜』（東京龍星閣、1956年）を執筆するなど精力的に活動した。

以上みてきたように、小林と山内の存在が、阪急美術部および『阪急美術』に大きな影響を与えたと考えられる。

おわりに

本稿では阪急百貨店美術部と『阪急美術』について概観してきた。阪急美術部および『阪急美術』は小林一三と山内金三郎の二人の手により作り上げられたといえる。小林一三の百貨店事業を含めた事業観と茶道を中心とした独特の芸術観と、山内金三郎の経歴と経験を背景にした広範な人脈と優れた企画が、阪急美術部を非常にユニークな存在へと押し上げた。洋画・日本画の大家と茶道具という一流の美術品と、民芸に代表されるサラリーマンにも手に取れる美術品が阪急美術部という一つの場に集められた。それらは展示や『阪急美術』を通して顧客に広く公開され、また阪急美術部を舞台に大阪・神戸近辺の茶人たちや芸術家たちが交流し、それらが大衆へむけて発信されていったのである。今回は阪急美術部創設の経緯と『阪急美術』の概観にとどまったが、今後は小林の美術観との関わりや『日本美術工芸』も含めた考察など、個別の論点をほりさげていきたい。

注

- 1 『高島屋美術部五十年史』高島屋美術部五十年史編集委員会、1960。山本武利・西沢保編『百貨店の文化史 日本の消費革命』世界思想社、1999。宮野力哉『絵とき百貨店「文化誌」』日本経済新聞社、2002。宮島久雄『関西モダンデザイン史・百貨店新聞広告を中心として』中央公論美術出版、2009。二分野良明『大呉服店から百貨店の誕生 江戸から昭和初期百貨店歴史絵巻』オフィス・コミイシ、2009。「美とまごころの100年 三越美術部の軌跡 時代を彩った展覧会」全10回、『月刊美術』pp.377～386、2007。「特集 デパート美術部の

- 逆襲 日本の美術文化・流通をになうデパート美術部の底力』『月刊美術』381、2007。廣田孝「明治期の百貨店主催の美術展覧会について—三越と高島屋を比較した—」『デザイン理論』48、2006。廣田孝「百貨店の美術展覧会—英国の催事スタイル導入の可能性を探る—」2009年7月12日第51回意匠学会研究発表会報告。ほか。なお、三越美術部は2009年『三越美術部100年史』を刊行しているが筆者未見である。
- 2 神野由紀『趣味の誕生 百貨店がつくったテイスト』勁草書房、1994。
 - 3 五十殿利治『観衆の成立 美術展・美術雑誌・美術史』東京大学出版会、2008。
 - 4 阪急百貨店の社史および関連資料は次の通り。狩野弘一『大阪急』百貨店新聞社、1936年。『株式会社阪急百貨店25年史』1976年（以下『25年史』）。50年史編集委員会編集『株式会社阪急百貨店50年史』1998年。
また、小林一三は自身の著作・評伝ともに多いが関連資料を一部挙げる。『小林一三全集』ダイヤモンド社、1961。『小林一三日記』、文芸春秋、1991。小林一三『逸翁自叙伝 青春そして阪急を語る』阪急電鉄株式会社、1979。佐藤博夫 編『小林一三翁の追想』小林一三翁追想録編集委員会1961。阪田寛夫『わが小林一三 清く正しく美しく』河出書房新社、1983。清水雅『小林一三翁に教えられるもの』梅田書房、1957。ほか。また、阪急の文化事業に対する姿勢を示すものとして宝塚に関する研究が参考となる。津金澤聰廣『宝塚戦略 小林一三の生活文化論』講談社、1991。川崎賢子『宝塚 消費社会のスペクタクル』講談社、1999。渡邊裕『宝塚歌劇の変容と日本近代』新書館、1999。ほか。
 - 5 この第1期阪急ビルの1階コンコースが伊藤忠太設計によるアーチ天井である。『25年史』p.104。
 - 6 呉服も当初高級品を扱わなかったが、元大丸専務美川多三郎はじめ経験者を入社させ、京都丸紅へ仕入・営業を依頼し京呉服の取扱を開始するなど路線を若干修正した。『25年史』pp.116～117。
 - 7 阪急百貨店はその後も改築を続け、昭和10年2月からの4期工事では、本館にあった茶室福寿荘は宝塚植物園に転置、本館より新館6階に新茶室福寿荘と充美会古美術品陳列直売部が移転、西側一部に趣味講習会室が配置された。本館美術品売り場は新美術品を拡張した。『25年史』p.156。
 - 8 北村直次郎（1875～1924）：京都生。第4回国勧業博覧会事務局美術部出仕、その後京都新聞社で美術・美術工芸品を担当。明治37年ごろより高島屋で『新衣裳』編集に参加するも日露戦争時は多忙となり退社。明治40（1907）年の大阪三越再開と同時に意匠係長として入社、同年9月より大阪支店新美術部主任とPR誌『時好』（翌年から『みつこしタイムス』）の大阪支店編集主任を兼任。「十五日会」「大阪美術展覧会」（大展）、「三日会」などに関わる。死後『鈴菜遺稿』（鈴菜遺稿編纂会、1924）が編まれた。
 - 9 「充美会の設立とその陳列」『小林一三全集』（五）pp.194～195。
 - 10 「書画骨董品の価格」『雅俗山莊漫筆』（二）『小林一三全集』（五）収録。「宗有・山田寅次郎氏と逸山・小林一三氏のお茶と世界の美術を語る会」『阪急美術』12号（昭和13年8月）。など。
 - 11 丹平商会森平兵衛が心斎橋に建設した丹平ハウス（大正13年5月5日、4階鉄筋で地下室有）は1階が薬局とソーダ・ファンティン（喫茶部）、2階が美粧部、写真室、画廊であった。
 - 12 昭和6、または7年設立。イギリスニュートン絵具の日本駐在員平春之の大阪市南区心斎橋順慶町に開設。のち美術印刷を手がけていた花房静也が参加、大阪画廊に改称。大河内菊雄「関西の洋画商」日本洋画商協同組合編『日本洋画商史』美術出版社、1985。
 - 13 パリのGalerie Marcel Bernheim（マルセルベルンハイム画廊）か。欧文表記はRoger Michael と思われるが現在確認できず。
 - 14 増田洋「京阪神地方における昭和初年の西洋美術の実態」既出『日本洋画商史』。青樹社は昭和14年3月大阪支店を開設している（御堂筋ガスビル北）。
 - 15 『大阪商工名録』（昭和15年度版）による各店の営業品目・所在地は次の通り（卸＝卸売、小＝小売）。*印のみ同昭和5年版による。
・井上柳湖堂：新古書画、茶器、骨董、古美術品（卸）。柳湖堂合名会社井上熊太郎商店。東区高麗橋二丁目三九。
・池戸高山堂：書画、骨董（卸）（小）。高山堂 合名会社池戸宗三郎商店。東区今橋三丁目一二。
*晴海商店：新美術骨董並二仲立業。株式会社晴海商店。東区高麗橋五丁目。
・戸田弥七商店：古美術品（卸）。谷松屋戸田弥七。東区伏見町三丁目一六。
・太田佐七商店：古美術、茶器古美術道具、抹茶器（卸）。合名会社太田佐七商店。東区伏見町三丁目。
・山中簪堂：新古美術品、雑貨類（小）。株式会社山中商会。東区高麗橋一丁目。
・児島米山居：新古美術品（卸）（小）。米山居合名会社児島嘉助商店。東区高麗橋三丁目二二。
・坂田作次郎商店：新古美術品（卸）（小）。株式会社坂田作治郎商店。東区高麗橋二丁目。
・水原聴雨堂：古美術品（卸）（小）。合名会社水原商店。東区淡路町二丁目一四。
なお、山中簪堂は小林の勤務先である三井銀行大阪支店の目前にあった。
 - 16 「日本民芸新生活品展特集」『阪急美術』8号（昭和13年5月）、「日本民藝品店のモデルルームを囲んで語る」同9号（昭和13年6月）など。
 - 17 山本真紗子「阪急「趣味」と日本美術の大衆化」同志社大学第1回芸術・思想国際研究夏季セミナー報告（2009年9月1日）。
 - 18 『逸翁自叙伝』pp.17～65。

- 19 小林一三の蒐集品は、現在書籍類は池田文庫に、美術品は逸翁美術館に所蔵・公開されている。
- 20 北澤憲昭「美術雑誌にみる明治美術の諸相」(連載)『日本の美術』pp.349～353、1995。五十殿利治『観衆の成立—美術展・美術雑誌・美術史』東京大学出版会、2008など。
- 21 京都の花道去風流機関紙『瓶史』、芦屋で発行された『壺』、茶人貴志弥右衛門による『徳雲』など。後述の山内金三郎も自身で『これくしょん』を刊行している。「阪神間モダニズム」展実行委員会編著『阪神間モダニズム 六甲山麓に花開いた文化、明治末期—昭和15年の軌跡』淡交社、1997。
- 22 価格は8号に特別定価30銭(送料3銭)になったほか、19号(「開店十周年記念特輯」昭和14年3月)から定価が30銭に改定。32号から35号(昭和15年8月)までと40号(昭和16年2月)～45号(昭和16年6月)は特別定価40銭(送料3銭)。統制の強化により38号(昭和15年11月号)からは価格停止商品となっている。『25年史』p.186。
- 23 大道弘雄。朝日新聞記者。別に「鍋平朝臣」などの筆名も使用。肥田皓三先生より御教示いただきました。
- 24 田辺加多丸(無方庵)小林一三の異母弟。小林一三の父甚八は、山梨県韭崎の豪商小林家の娘きくのと結婚・婿入りし、竹代、一三の二子を得るもきくのと死別。子供達は小林家が引き取り、甚八は塩山の田辺家長女たつと再婚、四男三女をもうけた。その三男が加多丸である。彼は銀行役員であったが晩年東宝の社長を務めた。焼き物に造詣が深かった。田辺節郎「身近にみた人間小林一三翁(講演会報告)」『館報(池田文庫)』27、2005。
- 25 小野賢一郎=小野燕子(1888～1943)俳人。古美術、とくに陶芸評論家として『陶芸全集』(陶器全集刊行会)など著作を多数刊行。『日本近代文学大事典』講談社、1984参照。
- 26 中井浩水。本名新三郎。1882年生。早稲田大学英文科卒。新聞記者(大阪時事新報学芸部など)。『阪急美術』43号より囑託で入社。父は大阪の豪商千種屋平瀬家につかえた。渡辺虹衣と『書画骨董掘出物語』を著す。これは「大阪を中心として近畿に於ける骨董界、好事界のくさ(原文くり返し記号)* *」を新旧、取りあつめて見たもの(『書画骨董掘出物語』緒言より)で、関西版『近世道具移動史』といえるものである。『新聞人名辞典』2『新聞及新聞記者』1921年10月号。中井浩水「平瀬露香遺事」『美術・工芸』14、1942。
- 27 加藤義一郎(1892～1874)『日本美術工芸』編集長・逸翁美術館副館長。京都市生、京都市立第一商業学校卒業。京都の林新助商店入店、在店中に『京都美術倶楽部青年会会誌』を編集執筆し小林一三に認められる。昭和16(1941)年林商店を辞め阪急百貨店囑託・『日本美術工芸』主幹となる。昭和32(1957)年逸翁美術館設立に参画、同36年副館長就任、昭和49年在任のまま病没。著作に『形物香合』図鑑篇・説文篇、全国書房、1946。『茶盃抄』、全国書房、隔月刊、1947・48など。『茶盃抄』(上)(下)・立風書房1977年復刻本著者略歴。加藤義一郎「お手紙に偲ぶ」『小林一三翁の追想』。
- 28 高原慶三(1893～1975)茶人(杓庵)・俳人(棠雨)。大阪生。慶応義塾大卒。大阪毎日新聞社に入社後、記者として活躍。昭和29年『茶凋三百選』3巻を刊行し淡交社より茶道文化賞を受賞。著作に『風流行脚昭和北野大茶湯』河原書店、1936など。
- 29 文芸春秋社、1951。『小林一三全集』第一集、ダイヤモンド社、1961に収録。
- 30 熊倉功夫「近代茶道史の研究」日本放送出版協会、1980年、pp.324～353。
- 31 『阪急美術』1号の巻末広告は「阪急茶席の御案内」(*各流が日替わりで担当する茶道教室の広告)である。
- 32 前掲注3参照。
- 33 その後、レヴューの登場や、フランス留学から帰国した岸田辰彌・白井鐵三らが目指した路線との違いなど、宝塚歌劇は必ずしも小林の構想通りには展開しなかった。
- 34 山内の経歴については肥田皓三「山内金三郎書簡」(上)(下)『館報(池田文庫)』26・27、2005。畑野栄三「山内神斧と『寿々』の時代」山内金三郎『寿々』芸艸堂、1994(大正7年の再版)。『これくしょん(吾八版)』31号(山内金三郎追悼号)、1967を主に参照した。
- 35 『25年史』pp.185～187。「本誌の回顧」『日本美術工芸』52、1947。
- 36 当時の作品として現在東京芸術大学に<結願>(明治43[1910]年、絹本着色、掛幅装、215.7×70.4)が所蔵される。
- 37 山内金三郎「小林翁の知遇を得て」既出『小林一三翁の追想』。
- 38 『主婦の友社の五十年』1967。
- 39 大正13年の第1回には芹沢銈介が入選。山内と芹沢の交際がこれをきっかけに開始し、芹沢はのち『阪急美術』表紙装丁も手がける。

* 本稿執筆にあたり、大塚融氏、肥田皓三先生より資料の提供をはじめご教示いただきました。末尾ながらこれを記し深謝の意を表します。(五十音順)

The Art Section of the Hankyu Department Store and the Development of New Art Fans

YAMAMOTO Masako

Abstract:

This paper studies the activity of Hankyu-Bijutsu-bu, the Art Section of the Hankyu Department Store, in the early Showa period by introducing a bibliography of the art magazine, *Hankyu-Bijutsu*, that Hankyu Bijutsu-bu published and focusing on Kobayashi Ichizo, the founder of Hankyu Department Store, and Yamanouchi Kinzaburo, who oversaw the policy and contents of *Hankyu-Bijutsu*. Kobayashi applied his business policy of providing quality products at reasonable prices to art to make it possible for his customers to obtain art works easily. Kobayashi's art activities were influenced by the spirit of the tea ceremony, for which he had a great appreciation. Yamanouchi, who was an editor and was previously an artist and a gallery owner, took advantage of his wide network within the art field. The synergy of the two men decided the direction of the Hankyu Art Section and made it possible for it to provide first-class art works for common Japanese. The effect of their activities was the creation of new art fans, who included office workers and others.

Keywords: Hankyu Department Store, Art Section, *Hankyu-Bijutsu*, Yamanouchi Kinzaburo, Kobayashi Ichizo

阪急百貨店美術部と新たな美術愛好者層の開拓

山 本 真紗子

要旨：

本稿では、戦前期の阪急百貨店美術部の活動について、同部発行の美術雑誌『阪急美術』の書誌と内容から検討し、その活動方針や内容に多大な影響を与えた小林一三と山内金三郎の美術観について言及した。小林一三は「良いものを安く提供する」という自身の経営方針を美術部にも適用、顧客が一流の画家の作品や古美術品を入手しやすい仕組みづくりを行った。また、自身の愛する茶道を美術部の柱の一つにすえ、茶室の開放や『阪急美術』の記事を通じ茶道の改革と普及に努めた。山内金三郎は、画家と画廊経営という前歴と、『主婦の友』記者時代の体験から得た画家・作家はじめとする広い人脈を活かし、『阪急美術』の内容を充実させさまざまな企画を実現させた。両者の出会いが一流品を扱うとともに美術の大衆化を実現するという阪急百貨店美術部の方向性を決定した。またこのような活動はサラリーマンを含む新たな美術愛好者層の開拓に一役買ったといえよう。

